

## 平成 26 年度 第 2 回 公民館運営審議会

平成 26 年 9 月 9 日 (火) 14 時 00 分～  
中央公民館 講座室 3

出席委員名：浮穴委員長、沼野副委員長、竹内委員、川崎委員、生長委員、大西委員、武本委員、加嶋委員、中野委員、関根委員、秋田委員、藤谷委員、井上委員

欠席委員名：南村委員

出席職員：薮内中央公民館長、大脇浜手地区公民館長、北野山手地区公民館長、稲田中央公民館長補佐

### 1. 各公民館 今年度の主要な取組みについて(報告)

◇前回審議会でのご意見を受け、各館の特徴を明確に打ち出したものを各館から報告した。3館とも地域連携事業について。山手はその中の「まちなかアートミュージアム」に特化したもの。

中野委員：山手の「まちなかアートミュージアム」については三館利用者連絡会からも積極的に応援、参画するようになっていきます。今後、「まちなか」以外にも、公民館まつり、近畿公民館大会、貝塚公民館大会といろいろありますが、われわれ活動協議会も団結して、貝塚にこんなに良いものがあるということを示し、成功させたい思いでいっぱいです。地域と密着して発信し、公民館の活性化につなげたいと思います。

秋田委員：今回の各館からの報告は、前回私が希望して出してもらいましたが、私の期待した内容で出されているのは、山手の「まちなかアート」に関する報告だけです。「まちなかアート」は一つの手段ですが、山手公民館の 26 年度の目玉の目標として掲げられていて、全国から作品を公募し、地域の人からは作品展示や場所の提供など様々な協力を得て、一つのイベントを成功させようとみんなが動いています。その過程で町会関係者や地域の人との信頼関係が生まれ、トータルの結果として最終的には地域との連携が図れると考えられます。

中央、浜手も地域連携事業について書かれていますが、公民館が地域と連携している状態とは、本当にどんな状態であるのかが具体的に示されていません。その状態を構想を練って出してもらえて初めて、そこにいく過程で、「今までこんな出前事業をしました。公民館まつりを行いました。」「これからこんな事業をします」と言われたときに、目標に達しているとか近づいているとかの評価ができます。

中央公民館においてもっと目を向けてほしいのは、いかにして若い人にクラブに加入してもらうかです。750人のクラブ員のうち65才以上の人が8～9割を占めていると言っても過言ではない状況があり、それは公民館もよく知っているはずですが。私の属する「パンづくりクラブ」では、公民館の夏休み親子対象事業に際し、今年は「父と子どもで作るパン作り」として協力し

ました。親子と言えば多くの場合母子なので、あまり集まらないかと思いましたが、10組の親子が集まり、アンケートには父の意見として「公民館でこんなことをしているとは知らなかった。もっと参加したい」という意見が多く書かれていました。こういう潜在的なニーズがこんなところに表れている以上、これを活かして今までとは違った方面に、また違った方法で働きかけるなど工夫をこらさないといけないと思うので、従来通りの事業が行われ続ける事には疑問を感じます。

また、浜手の「ふれあいまつり」については、これまで利用者連絡会を中心に創りあげていたのが、今年は地域の団体といっしょに実行委員会を結成し創りあげていくことによって地域との連携を図るとの説明がありましたが、地域のどんな団体とどのように協働するのか、協働して創りあげられたまつりとはどんなものか、それらが具体的に示されたら、地域との連携がとれている状態とか、そこに至る手段とかが、わかるのです。

公民館は何を尺度に、地域と連携できているのかどうかという評価をしているのですか。毎年同じような事業をして、それが公民館の地域と連携する事業だというのは、違うのではないかと思います。

蕨内館長：今のご意見のように、中々評価をしていただきにくい状況にはありますが、地域連携事業というのは非常にみちのりが長く、すぐ結果が出るとか成果につながることは至らないということがあります。中央や浜手で真新しいものがないのは心苦しいですが、ご意見をいただきながら、みなさんの生きがいとなるような事業を地域にも広げていきたいと考えております。

大脇館長：山手の「まちなかアート」のように、今年の特徴的な一大イベントと言えるものはないのですが、同じ取組みであっても、続けていくことが大事だという思いで地道に続けているところです。ただマンネリにはならないように気をつけていますし、もっと地域にいきまなければならないということであれば、そういう方向で考えようと思います。地域連携事業ではないですが、浜手で夜間に開催している「オトナ」シリーズは今回5回目となります。マンネリにならないよう、何か新しいことを見いだせるよう、大変力を注いでおります。

大西委員：中央の地域連携事業で、健康体操や寄席自体が目的ではなく、仲間づくりが目的だと言われていましたが、そのように手の内を見せて地域に出してしまうと、「公民館が1回してくれる健康教室なんだわ」と思われて後が続かないと思います。「本当にみなさんの健康づくりのためにしているのですよ」「楽しい寄席を提供しているのですよ」ともっと前面にだしたら良いと思います。そこで楽しんで「またやろうね」「健康体操5回ぐらい続けましょう」となれば、本物になるのではないのですか。地域でこんな事ができるというサンプルで持っていくのではなく、本物として持っていく。1～2回出かけて「仲間作ってくださいね」というのではなく、うちの町会館で定期的にこんなことが行われているのだという事が、じわーとしみていくような状態になるまできめ細かく関わると、成果があがるのではないかと思います。すぐには成果が表れなくても、やがてしみこむように伝わっていく…こ

れが公民館の価値だと思います。それには衣替え(衣つけなおし)も必要ではないでしょうか。

中野委員：先日の貝塚公民館大会のときに、山手公民館に近い東山町会に案内のチラシを配りに行ったら、多数の方が来てくださいました。また町会で新聞も発行していて、後日見せてもらった公民館大会のことも掲載されていました。町会に出かけて行って直に話し合うと、このようにつながりができるのだと嬉しくなりました。

武本委員：少し外れるかもしれませんが、中央公民館の事業「おでかけよちよちサロン」で西校区の町会に出かけているという説明があったので、思い出したことがあります。私は西校区の福祉委員会の役員をしておりますが、ここに入っていない町会にも「福祉委員会だより」を配ってきました。新興住宅地の町会は、町会連合会に属さず、民生委員も選出していないなど、福祉委員会の活動をすすめるについていろいろ苦勞することがあります。公民館事業が突破口となって、この「よちよちサロン」のお世話をしてくださる方が校区福祉活動にも関心を持ってもらうなど、地域の福祉活動にひろがっていけばすばらしいと思います。ただ毎年同じように出かけているだけではだめかもしれませんが、地道な積み重ねが功を奏すれば良いと思います。

沼野副委員長：前回の加嶋委員や秋田委員の意見を踏まえて、私たち審議会委員が意見を出しやすいように設定してもらう事を望んでいたのですが、今回の資料を事前にもらった時はやはり内容が漠然としていて、どう話し合いをすすめればいいのかと思いました。私たちは1回限りの感想を出し合うのではなく、それぞれの立場から出ている継続的な組織なので、話し合いが充分なされない、せっかく集まった組織が活かされずもったいないことになります。私たちの方もいろいろ勉強して、提案しなければいけないと思っておりますが、公民館の方でも是非そのような設定をお願いします。

浮穴委員長：今回の報告で、町会や学校等によく出かけているという印象は受けました。「すこやかネット」(地域教育協議会)は私の頃はなかったですね。ゆっくり進んでいるという感じです。あと、数字(データの事)をいれてもらえたら資料としてよくわかると思います。先ほど若い人の割合の話が出ていましたが、富田林で巡回公民館に出かけたときにアンケートをとると、公民館に行ったことも見たこともないという人が6割もいました。そういう数字的なことをいれてもらえればと思いました。

## 2. 秋事業について (秋タイムズ掲載分及び追加事業について)

◇秋タイムズ掲載の講座等について各館から説明。タイムズに掲載していない分については、今後の市報や地域限定の広報紙、チラシ等でお知らせする。

浮穴委員長：中央公民館の市民企画講座「精神障がいを受け入れる町づくり」の反響はどうですか。

稲田補佐：今のところ申し込みは少ないという状況です。

竹内委員：市民企画講座とはどういう手順でできあがるのですか。

稲田補佐：5名以上のグループであるとか、上限3万円で公民館が費用を補助するとか、申込資格や支援内容などにいろいろな取り決めがあるのですが、グループから「こんなことを学んでみんなに広めたい」という申し出があったら、審査していっしょに取り組んでいきます。

竹内委員：はっきり形になっている場合と、漠然としている場合があって、いろいろ大変だと思いますが…。

稲田補佐：今まで年に1回もないぐらいですが、今までの例では、すでにさまざまな活動をしているグループでしたので、講座内容も1回目はこんな内容でほしい、2回目は…というように確立させて持ってこられました。今回もそうです。

浮穴委員長：「シングルママのほほえみタイム」では講座修了者がグループを結成するなどはありませんか。「発達障がい」の講座からグループができたように。

稲田補佐：児童福祉課の母子寡婦福祉会と共催で行っておりますので、もともとこの会に入っている人が多いです。会以外の人でチラシ等をみて受講する人もいますが。

藤谷委員：たくさんの企画を試行錯誤のようにされていると思いますが、職員側からの発案だけでしょうか。市民の、こういうことをしてほしいという声を吸い上げるという事はされていますか。目安箱ではないですが。

沼野副委員長：中央公民館のチラシの「就活の始めかた」は、大学生も再就職希望の人も保護者さえも対象にしているようですが、市民から何か要望があったのですか。また大学に配りに行くとかされるのですか。待っているだけではあまり来ないようにも思いますが…

浮穴委員長：集める努力は必要ですね。八尾で以前「ATMの使い方」という講座もあり、こんなのもあり？と驚きましたが、成人でもそういうことがわからない人もいるでしょうね。

稲田補佐：市民の声を吸い上げるという事について、ですが、ふだんの講座の修了時にアンケートをとったり、文化事業の際のアンケートなどでも、その催しについてきくだけではなく、公民館全般についての要望などもきくようにしています。

沼野副委員長：公民館に来ている人達だけにきくのではなく、ふだんの生活で困っていることや学びたいことについて、広く市民にきけたらいいですね。

藤谷委員：地域に出かけていろんな話をして、コミュニケーションがとれた中でできることですね。そこが地域連携事業の大切なところだと思います。

浮穴委員長：かつて小学校の全員にアンケートをとり、一番多く要望のあった講座を開催したことがあります。全然申し込みがなかったという事もありました。アンケートにはいい加減に書く人もいるし、生活課題をきっちり書く人もいます。何を上げるかは公民館の裁量ですね。

藤谷委員：意見をきいて実施してもあまり来なかったり、というのは我々のグループでもよく経験します。時間や時期の兼ね合いもあるでしょうけど。中央は土曜は結構ありますが、浜手に比べ夜間の講座が少ないかなと思います。

浮穴委員長：今後は「今年はこれが目玉です。」という報告をしてください。

3. 全国公民館研究集会について 2014.10.16(木)～17(金) 埼玉県熊谷市他)

沼野副委員長：できるだけ新しい方に行ってもらいたいと思いましたが、ご都合がつかないようなので、私がいかせていただきます。旅費や宿泊費が公費で保障されていることは大変大きな意義があります。次回の審議会で報告をいたします。

4. 近畿公民館大会について 2014.11.14 (金) 貝塚市

藪内館長：これにつきましては、10名分の参加費の予算がありますので、できるだけ多くの委員さんにご参加いただきたいと思います。貝塚駅東口からはシャトルバスも運行しております。(水間鉄道の活性化のためにそちらの増便もお願いしましたが、かないませんでした。)各分科会会場は、いずれも中央公民館周辺で6会場を用意してございます。

5. 第3回貝塚公民館大会について 2015.2.14(土) 山手地区公民館ホール

藪内館長：今年2月に引き続き、来年の2月に前回より規模を縮小させて開催したいと思います。基調講演、グループディスカッションを含め3時間程度、200～250人の規模を目指しております。9月26日の実行委員会から具体化していきます。

6. 次回の研修について

竹内委員：委員の役割をはっきりさせることについて、前回、今回と意見が出されていますので、そのことに役立つよう学習会を企画しました。

- ① 公民館からの報告をきいたり他の委員の意見を聞いたり、また「答申」を読んだりする中で、公民館に関わって大切にしたいと思う事を一つだけあげてください。
- ② なぜそれを大切にしたいのかの理由を述べてください。
- ③ これは付録ですが、そのことの実現方法を思いつくのであれば書いてください。

これを事前に出していただいて、次回の審議会の時にグループにわかれて討論をしたいと思えます。何を大切にしたいのか、なぜそう思うのかを尋ねあって、エピソード等も交えて語り合ってください。

地域社会がうすれゆく中で、人と人との信頼のネットワークが築かれているところは経済発展もしているという報告があり、公民館がそのことにおいて役割を果たしてきたことは文科省も注目しています。こういうことも念頭において、公民館として(自分として、ではなく)何を大切に思うかを討論の中で話をしてください。(10/31までに公民館に提出)

## 7. その他 まちなかアートミュージアム

北野館長：現在チラシは20,000枚作成しております、全戸配布はできませんが、今後広範囲に、美術館等にも配布していきます。チラシに掲載している人形は、東京の高校生が作成した作品で、背景にも気を配って撮影しました。今後もっと詳しいチラシ（どこに何が展示されているかが示されているマップなども掲載）等も発行します。作品は現在13作品が集まっていて、配置の割振りをしていきますが、中には蚊取り線香を使用した奇抜なものもあります。

沼野副委員長：審議会をどのように進めるか、有効なものにするかの課題に、先ほどの学習会がどう響くか未知数ですが、加嶋委員はどうですか。

加嶋委員：手段としての事業内容については、前回よりも詳しい内容が示されてわかってきたのですが、肝心の目指しているところの姿がまだ漠然としているので、そこに至る道のりの、今どういう地点まできているかも見えてこない感じです。新規講座については、思いつきでされているのではないと思いますが、どういう声があって、どういう地域課題があって、というのがわからないので、それも説明してもらえたらと思います。

竹内委員：到達地点と、今どの地点まで来ているのかがわからないという事ですが、これは「ない」と言ってもいいです。何パーセントまできたという数字はつけにくいと思います。公民館に関わる人の自己実現を図りながら絶えず同じことを（方法は工夫して）繰り返し、積み重ねていかないと、いつでも崩れる危機はある。今日の講座で50パーセントまできたと思っても、明日につながるとは限らない。目標はさらに上がることもあるし、絶えず繰り返すことで初めて公民館の思いが実現するので、数字はおそらく出ないと思います。

浮穴委員長：限りがないですね。やっところまで来たと思っても、もっとできるだろうと要求される。到達点はあつてないようなものかもしれません。

加嶋委員：数値化というのではないのですが、いろいろ漠然としていて講座の企画理由等もつかめないのです…。

沼野副委員長：唐突な感じは受けますよね。「就活」のことも、私からチラシを配って勧めるにも、どんな言葉添えをすればいいのか悩みます。開催日ごとの内容は詳しく書かれているのですが、真のねらいが何なのかがわからないと、書かれていることを言うだけになるので。

浮穴委員長：企画の理由を説明できないと駄目なのですよ。何となく流行っているからではなく。

沼野副委員長：前年度のまとめ(「あゆみ」)に詳しく講座ごとのねらい、状況、課題等が書かれていますね。新年度の講座について意見を述べるときに、あれを読みながら「去年の課題はこうだから、今年はこんな風に…」というようにするのもいいですね。

大西委員：「おやじの何でも挑戦」は50才からになっていますが、団塊世代へのお誘いとして60才からでもいいのでは、と思いました。この世代を公民館に呼びたいという感じはわかりますが、これも唐突な感じを受けました。このチラシだけでは来ないでしょうね。地域でお散歩するぐらいのこの世代の人に、公民館に出てきて社会的な活動をするまでになってもらうためには、現に公民館に来ているこの世代の人に、どうやったらおやじが出られるようになるのかを話してもらってすすめてらいいと思います。

藪内館長：「おやじの何でも挑戦」は若い職員の初めての企画です。私が陶芸などで公民館に来られているこの世代の人に話をきくと、定年を控えた頃に初めて公民館に来たという人が多かったです。今のご意見のように定年後すでに家にいらっしゃる方をも対象にしていますが、一番のねらいはまだ現役でいるうちに、定年後の生き方を模索してもらう一歩としていただくことです。どのような反応があるかは未知数なのですが。

秋田委員：私は48才から公民館活動をしています。それはやはり自分の定年後の生き方を考えた時に、公民館の利用という選択をしたからですが、陶芸などから入ろうという事ではありませんでした。

浮穴委員長：次の審議会の時に1回目は終わっているので報告してもらいましょう。

川崎委員：学校現場から考えた時に、公民館は近い存在ではないですね。個人的には利用者や職員に友達がいる関係で近い存在ですが、職場で市民の教員からさえも話題にあがったのを聞いたことがないですね、不勉強な面もあると思いますが、届いていないのが現実かと思います。どうしたら活性化するかということですが、市民でない立場から見えて、よくやっておられるとは思いますが、総括を読んでも参加人数などが書かれていない、アンケートに書かれたことが載っていてもアンケートの様式が載っていないので、ただ単に感想を書くものなのか、それならアンケートの意味がないなど、この講座で何を大切にしているのかがちょっと見えにくい状況にあるのが課題かなと思いました。

学校現場としてはかつて総合学習の時間があったり、小学校の生活科や社会科でお世話になることがあって職員を頼りにしています。教師にしてみれば、自分自身が市民であろうとなかろうと、貝塚市に住む子どもたちに教えるのですからもっと頼ろうとして良いのですが、教師にその姿勢がなかったり、どう頼っていいのかわからなかったりします。教育課程の変更の関係で総合学習の時間もなくなりましたが、児童や生徒にも公民館を活用してもらおう意味で、もっと公民館と学校とのコミュニケーションがあれば良いと思います。公民館のほうも教師とは話しにくいかもしれませんが、校長や教頭ばかりに話すのではなく、現場の先生で親しい先生をつくっておくとかしてもいいのではないかと思います。

浮穴委員長：10年ほど前は、富田林でも学校から公民館にいろいろなもの(茶道の道具や花器など)を借りに来たり、逆に公民館からお願いして大人相手に、学校の先生に授業をしてもらったりしました。市民大学はあっても市民中学はないので、先生も一生懸命下調べをし、受講者もはりきって

英語や数学の授業を受けました。最終日は家庭科で料理を作って交流会です。双方にとって大変新鮮だったようで好評でした。公民館のロビーに子どもの絵画作品を展示することを学校に呼びかけたこともあります。これは学校側の反応がありませんでしたが…あとチラシの全校配布はしょっちゅうお願いしていましたね。

川崎委員：子どもを通して配られるチラシを保護者がみて、その講座には参加できなくても公民館でこういうことをしているのだと関心をもってもらえる。このように事あるごとに刻印しておいて、即効性はなくてもじわじわと広がるようにするのも一つ方法と思います。

竹内委員：公民館と学校が連携する例は全国的にもまだ少ないですが、子どもの頃から公民館に行っていた経験がインプットされていると、大人になった時に違いますね。

生長委員：子どもの頃に公民館まつりに行ったことは覚えています。今はコミュニティ機材の借用でお世話になっています。8月分は三館いっせいに抽選があるのでそちらに参加したりしています。教えてほしいのは市民企画講座のことですが、市民企画講座と、公民館で主催して企画するのではどれぐらいの割合なのですか。これは市民の方が持ってこられて、相談して形にするのですよね？

稲田補佐：はい。でも年に1回あるかないかぐらいなので、公民館の企画した講座がほとんどを占めています。

生長委員：「まちなかアート」は今年2回目、今回は場所を貸してくれるところなどが前回より増えているのでしょうか。

北野館長：はい。ロコミ等で広がりお願いしに行っていて、だんだん増えていっています。そういうつながりが大事だと、感謝しています。

関根委員：いつも審議会で言われている内容が抽象的だと感じておきまして、「答申」の中にも「なぜ趣味・教養的なことを学ぶだけではだめなのか」「なぜ自分達だけの情報交換や悩みの出し合いだけではだめなのか」というところがあったんですが、私などはまさしくそれで、それでいいのではないかと思うんです。ふだんは、一見趣味のサークルとして活動しているだけのようでいて、実は障がい者施設や作業所の長の集まりにも参加して、話し合っただけ希望を聞いたり、実際作業所等に出かけて出演したり、自分たちの活動が役立っているのだと実感できる場面も多くあります。私も編み物のサークルに入っていますが、公民館活動をしたおかげで、この年で何か地域に役立っているのを嬉しく思っています。ここで言われている事業のこととは程遠いかもしれませんが、このような地道な活動でいいのではないかと思います。

次回審議会

平成26年11月20日(木) 15:00～ 懇親会 17:40～